

Sample Translation

Japanese to English

Original

by Reizei Asahiko

様々なナショナリズム

冷泉 彰彦

ジャッパン・メール・メディア

911／USAレポート第46回目

2002年6月29日発行

編集者村上龍

Translation

by R. A. Stegemann

Looking at world nationalisms through an overseas japanese prism

This article first appeared on June 29, 2002 in Japan Mail Media edited by MURAKAMI Ryû under the Japanese title *Samazama na nashonarizumu*. It was translated into English and posted on EARTH's webpage in July 2002.

様々なナショナリズム

6月25日東部時間朝の午前7時半、NYの34丁目、通称コリアタウンでは真っ赤なTシャツやバンダナに身を染めた若者が「大画面プロジェクターあります」と張り紙をした喫茶店に続々と吸い込まれていました。私は116丁目のコロンビア大学に行かねばならず、太鼓の音と共に上がった叫び声を聞いただけで、その場を立ち去らねばなりません。7番街に向かって歩いて、角を曲がると、もうそこには熱狂はありませんでした。自分たちのUSAチームがベスト8まで行ったことさえ知らない、静かな通勤の群衆がいつもと変わらぬ朝の光景を作っていました。

数時間後にインターネットでチェックしてみると、祭りは終わっていました。韓国はドイツに破れ、決勝戦は開催国から見て第三国同士の対決となったのです。開催をした日本と韓国にとって自国チームをめぐる騒動は、ここでひとまず一段落、後は試合の面白さに集中ができるというものです。それにしても、すさまじい熱狂でした。韓国の騒ぎ方に比べれば、日本の熱狂は遠い昔のようにも思えますが、大きな事件であったことには間違いありません。

今回のワールドカップがもたらした「事件性」というのは、「ナショナリズム」というものが、鮮やかに目に見える形で2002年の東アジアに出現したということでしょう。サッカーに触発されたものではありませんが、国ごとにまとまった情念が「自国びいき」という勢いに集約されてゆく、その情念はナショナリズム以外の何ものでもありませんでした。

では、そうしたナショナリズムは否定しなくてはならないのでしょうか。薄汚い政治家が人気取りや軍事的な冒険のために大衆を煽る心理や、どの国にもいる家庭や社会に居場所を失って「国家」に自己を重ね合わせて排外を叫ぶ負け犬の心理、いわばナショナリズムの暗黒面と、あの熱狂は同じだったのでしょうか。私は違うように思います。必ずしも否定する必要のない、どちらかと言えば微笑ましい光景として見守ってゆくことのできる、情念とはいえ、そんな風に思えてならないのです。

韓国＝ドイツ戦の24時間後、26日の午前7時20分、今度の私はNYのペンシルベニア駅を歩いていました。ふと横を見るとヒスパニック系のコーヒーショップがあり、二台のTVでW杯の中継を見せていました。それはディズニー系列ではなく、ヒスパニック・チャンネルの中継でしたが、ブラジル＝トルコ戦の直前に控え室で子供たちと入場を待つ両国選手の表情から、入場の様子、そして両国国歌をきちんと中継していました。国土の広さを感じさせるおおらかなブラジル国歌、そして伝統のマーチ風のトルコ国歌、どちらも悪い印象ではありませんでした。

そうなのです。ディズニー系列のESPNでは、番組は25分からで、30分のキックオフまでは「45分間CM抜きの放映に協力していただいている」スポンサーのCFを延々と流していて、国歌は一切放映していないのです。まるで、アメリカ以外の国の国歌には関心がないかのようなディズニー系列に比べて、ヒスパニック・チャンネルの放映では、貴賓席の皇太子・雅子夫妻なども含めて試合開始直前の表情を丁寧に伝えていました。

コーヒー・ショップの内外には、通勤を急ぐ人たちの波が押し寄せていました。そんな中で画面に見入っていたのは、私ともう一人ブラジル系とおぼしき男性だけで、後の無数の人々は、昨日と同じように全く無関心で通り過ぎて行きました。サッカーに無関心なアメリカの群衆に囲まれて、小さなTVでヒスパニック・チャンネルの映像を通して、ブラジルとトルコの国歌を聴く、それは実に奇妙な経験でした。私の心情を含めて、そこには、ナショナリズムが様々な形で混ざり合っているようにも思いましたが、何一つとして攻撃的であったり排外的であったりするものはなかったのです。

今回の大会を色どった様々なナショナリズムの中でも、韓国の騒動については、「レッド・デビル」というサポーターの色とともに、最終的に世界中のメディアで取り上げられましたから、最大の事件と言って良いでしょう。主要国中サッカーに最も関心の薄いアメリカのメディアも

ですが大きく取り上たのですから。その熱狂ぶりは、審判団への強い圧力になったのでは、とか、街頭モニターを合わせると300万人、いや700万人を動員したとか、様々なことが言われています。

ですが、準決勝での敗退という事実を受けても、暴徒化することはなく、静かに三位決定戦への期待をつなぐ側面を見ますと、常識的なものを感じます。事実、これまで対ポーランド、イタリア、スペインと、劇的な勝利のたびに、紙吹雪が舞う大騒ぎを全国の都会やサッカー競技場では繰り広げてきたのですが、どの試合の後も黙々と後片づけをする市民の姿があったのだと言います。興奮した男性がペットボトルを投げようとしたら、女性サポーターが「みっともないから止めなさい」と制止したなど、韓国からのニュースでは「熱狂の中にある冷静」を自画自賛する記事が目につきました。

熱狂の背景にある情念も、試合ごとに変化して行ったようです。アメリカ戦では、ブッシュ政権の南北分断固定策や、駐韓米軍への反発が一気に噴出したようですが、その後、勝ち進むにつれて政治色は薄まっていったのではないのでしょうか。韓国の有名な新聞『東亜日報』の日本語ホームページを見ますと、「政治家は腐敗しているが、サッカーに盛り上がる市民には常識がある」であるとか、「独裁政権は愚民化のためにスポーツを利用したが、今回のお祭り騒ぎは市民の成熟が主体の健全なもの」とか「宗教や地域同士が抗争を繰り広げてきた愚かな時代の終焉」という観点など、不思議なバランス感覚を示していて興味深いものがあります。

NYタイムスなどは、韓国の熱狂には日本への対抗意識がある、などと知ったかぶりの記事を書いていましたが、むしろ、今回の熱狂では「大韓民国」という国名を叫ぶ群衆には「反日でないナショナリズム」の芽生えがあると見るべきでしょう。統一問題を解決するに当たって、現実的な政策で一步一步コマを進めてゆくこと、日中露米四カ国との「等距離」を貫き地政学上の難しさを代理抗争の口実にさせないこと、など大きなテーマを抱える韓国にとって、人心がそんな風に健全な自負心を持つことは、東アジアの、そして日本の安全保障に取ってもプラスに他なりません。

日本はどうでしょう。第二次大戦の敗戦という事実を受けて、日本のナショナリズムは、真っ二つに引き裂かれてきました。敗北の無念を忘れまいという勢力と、敗北に平和の原点を見出す勢力が、それぞれ外国の悪口を言ったり、内にこもったりして現実と遊離し、近隣諸国の現在と未来への関わりを弱めてきました。

今回の青一色に染まった日本のスタジアムは、そんな古くさい分裂を忘れさせるような無邪気なものであったように見えます。サッカーに興じるなかで、自然に自国チームを応援する、何もかもが年々悪くなっているような世相に反して、8年前のドーハや4年前のパリに比べて、明らかな進歩を遂げた代表チームに希望を託す、それは罪のないものであったように思うのです。ですが、メディアの過剰反応や、一部に見られた嫌韓意識のようなものを総合すると、このまま『ニッポン、ニッポン』と叫び続けることが良いのか、私には分かりません。

私は、日本の政体（国政のなりたち）というものは、敗戦を受けて傷ついたままであると思います。敗戦に際して、君主の交代がなく、憲法が停止されず（新憲法は明治憲法の正規の改正手続きに則っています）、いまだに初代を伊藤博文から数える総理大臣も戦前の権威をひきずっています。その結果として、政体は第二次大戦の枢軸国として傷ついたままなのです。政体が傷ついていますから、新憲法の前文で戦後処理について反省的に述べておく必要があり、海外での軍事行動など防衛面での活動に自制をしているのも当然でしょう。

問題は、政体が傷ついているとして、庶民はどうかという点です。私が「分からない」というのは、日本の庶民にはサッカーで「自国びいき」の熱狂をする上で、何の遠慮も要らないのか？、という点です。庶民が、傷ついた政体とは無関係に、自分たちは21世紀に生きる普通のサッカー好きとして『ニッポン、ニッポン』を叫ぶのなら何も問題はないのです。むしろ韓国に比べて声が小さいのを何とかすべきかもしれません。ですが、そこで傷ついた政体と自分を混同してしまうと、妙なことになります。

ロシア戦直前に「日露戦争」などという文字を踊らせるマスコミ、韓国チームの活躍に冷淡な

姿勢などには、傷ついた政体を何とかしたい、政体も庶民も一緒になって『ニッポン、ニッポン』と叫びたいという心理が見え隠れします。大勢の人が道頓堀に飛び込んだというのも、羽目を外したい無邪気な心理の影に、日ごろは抑圧されている政体と一緒にあったナショナリズムを叫びたい心理があるように見えます。だとしたら、これは健全ではありません。

では、日本は特別な国なのでしょうか。今のままでは政体の名誉は回復されず、庶民は政体と自分を混同したらナショナリズムが「暗黒面」に移ることを警戒しなくてはならない、それは特別なことなのでしょうか。私はそうは思いません。日本だけが特別ではないのです。インディアン虐殺と世界中での軍事力展開という「傷」を負ったアメリカの政体、植民地主義の過去と連合王国の独善をひきずるイングランドの政体、大躍進や文革という大きな罪を背負った中国の政体など、どの国の政体も傷を負っています。本当の名誉などないのでしょうか。一見すると無垢な被害者を名乗れそうな韓国の政体も、反共テロや過酷な軍政という過去をひきずっています。

そう考えると、日本が特別ではないようです。日本は、むしろ問題の本質が見えやすい、少なくとも外交や安全保障の問題で、政府が無茶をしにくいような構造になっていると言って良いでしょう。『ニッポン、ニッポン』の大合唱には、果たして暗黒面はなかったのでしょうか。それは、これからの東アジア外交におけるメディアと世論がどの程度成熟できるかにかかっているのでしょうか。

ロシアでは、日本戦の敗戦直後にモスクワで暴動が起き犠牲者まで出る騒ぎに発展しました。ですが、これはゲームの雰囲気作用した悲劇と言って良いでしょう。一点が取れずに時間との戦いとなる中で、無謀なショットを放っては感情的なしぐさで自滅して行ったロシアチームの情念が、TV映像を通してモスクワのサポーターに伝染してしまった偶然と言うべきです。ブッシュ政権の日露離反策に騙されて、愚かな情念に身を任せたなどというのは大袈裟でしょう。

ここアメリカでは、ベスト8に残った途端にメディア各社は慌ててサッカー特集を組み始めましたが、盛り上がりは数日だけであって、ドイツ戦に敗北すると報道もしぼんでしまいました。今回は、サッカー後進国という事情もありますが、アメリカの世相が混迷を極めていることも大きいのでしょうか。26日にはエンロンに始まった上場企業の不正経理スキャンダルが、長距離電話会社ワールドコムに波及しました。波及というのは実は不自然で、同社の経営内容については数カ月前から怪しいという噂が駆け巡っていました。こうして不正が暴露されてみても意外感はないものの、計3.8ビリオン(4600億円)という粉飾決算の金額が並ではありません。おかげで、収まりかけた市場の混乱は迷走を続けています。

研究のために毎日マンハッタンに通う私は、朝6時半にプリンストンの駅を出る電車を使っているのですが、この便はその名も『ウォール・ストリート・ジャーナル』を読みながらウォール街に通う人たちで満員になるのです。ですが、27日木曜日の朝の雰囲気は違いました。みんな、疲れ果てていて新聞どころではないのです。そうして「何となく顔見知り」程度の間柄で、口々に愚痴をこぼしあっているのです。国内株のディーラーでしょうか「毎日本社、どこかが火だるまだもんな、もうやってられないよ」、そんなため息が次から次へと連鎖してゆきます。

「私のとこなんて、今朝は8時から臨時会議、昨日も残業で会議会議、会議やっても知恵が出るわけじゃないし、市場は最低だしボスは無能・・・」濃紺のスーツをきちんと着こなした40代の女性が、投げやりな口調で皆に聞こえるように隣の席の男性にまくしたてています。それもこれも、エンロンの追及が遅れているからなのです。政治家、はっきり言ってホワイトハウスの高官(恐らくはナンバー2)まで責任が明るみに出なくては、霧は晴れないのでしょうか。それまでは、企業会計制度そのものへの疑心暗鬼にかられた市場は、次から次へと生け贄の羊を求めて、売りを浴びせてゆきます。

ワールドコムにしても、先に追い詰められたタイコ社にしても、エンロンに比べれば倫理的に悪質とは思えません。結果の数字を見れば惨憺たるもので、それをこれまで表面的に発表していた数字と比較すれば、確かに粉飾決算に他なりません。ですが、エネルギー政策でホワイト

ハウスに癒着して、カリフォルニアの電力需給から、二酸化炭素の排出量問題まで、それこそ国家の政策そのものの闇に関わりながら倒れていったエンロンに比べれば、ハイテク・ブームに乗って集めた資金の運用をしながら「もうこの辺りが底だろう」との見込みで、巨額の投資を続けた企業が結果的に追い込まれただけです。

確かに国内外の子会社を使い、投資を分散させてリスクを先送りする経理スタイルには問題があります。ですが、こうなると、ITブームに乗って「ニュー・エコノミー」を夢見た1990年代の全てが誤りだったということになってしまいます。こんなことでは、これから先に大きな時代の転換点に当たって、巨額の資金を集めて産業を変革してゆく、そうした大仕掛けな資本主義のパワーがなかなか使えなくなってしまうのは問題です。

ちょうど、カナダのカナナキスではサミットが開会し、グローバル経済に反対を唱えるデモ隊が会場を囲んでいると報道されています。確かに、国際化した資金が、弱小国の通貨を破壊したり、労働力を不正に安く使ったり、途上国の環境を破壊したりすることはあるでしょう。ですが、お金は無色透明なのです。経済的な繁栄や、経済的な利害に主導された社会構造転換を全否定はできません。今回の市場の低迷によって、当面はアメリカの資本主義が社会の構造転換をするだけのパワーを失う、そのことが気掛かりです。現状が続くようだと、国際社会でのイニシアティブを、経済ではなく軍事行動で取ってゆこう、そんな考え違いを許すからです。

株式市場をめぐる混乱の中には、人気のあった生活評論家のマーサ・スチュアート女史のインサイダー取引問題など、「あんな人が」というようなスキャンダルも含まれていて、余計に気を重くさせます。そんな中、26日には西部地区の連邦の控訴裁判所が、学校での『国旗への誓い』の唱和について「神の下に」という語句が信教の自由に反していて違憲だ、という判決を出して注目されました。ですが、民主党を含む世論迎合型の議員達から「驚きべき、愚かな判決」などと猛烈な反論が来ると、一旦その判決の効力を棚上げするという迷走ぶりです。一方で、翌日の27日には、連邦最高裁が宗教が設立した私立学校に対する公費支出を合憲と判断しました。司法というアメリカ民主主義の守護神も、911以降の世相に対してまだ確かなものを示すことができていません。

アメリカのナショナリズムは、大きな混乱の中にあります。無邪気に「USA、USA」と叫んでいた冬季五輪の頃とは、何もかもが違います。政権は「反テロ戦争」の継続で、何もかもがごまかせると信じているようですが、911以来の星条旗はためくナショナリズムはもう完全に白けてしまったのです。7月4日の独立記念日の花火は、そんな混乱の中ということになります。それは、それで良いのだと思います。この混乱の中から全く新しい何かを探すことに、アメリカ社会の希望があると言って良いのでしょうか。

冷泉彰彦。「さまざまなナショナリズム」、911/USAレポート第46回目『Japan Mail Media』村上龍編集者、2002年6月29日発行。

<<http://jmm.cogen.co.jp/jmmarchive/r012047.html>>

文字数：6579

行数：199

Looking at world nationalisms through an overseas Japanese prism

by REIZEI Asahiko

translated by R. A. Stegemann

It was 7:30 AM on June 25th in the 34th block of New York City. On a paper banner in front of a tea salon was written "large-screen projector inside". A stream of youth, clad in bright red bandanas and t-shirts, were pouring into the salon. It was Korea Town, and the air was filled with the sounds of many drums and cheering voices. When I turned into 7th Avenue on my way to Columbia University in the 116th block, the fervor suddenly disappeared, and I could hear only the early morning quiet of bustling commuters seemingly unaware that the United States had even made it into the quarter finals.

Several hours later I checked the internet. The party was over. Korea had lost to Germany and would be just another third-party observer to the final match. The fervor of Korea and Japan, the two co-hosting nations, would pause, and everyone could finally focus their attention on the games themselves. Though Japan's excitement already seemed a distant epoch away, there was obviously no mistake that, it too, had participated in this great fervor.

What has made this year's World Soccer Cup different from all the rest was not a single unforgettable incident; rather, the remarkable display of national spirit shown by the nations of Northeast Asia. Surely it was soccer that triggered the concentrated outpour of enthusiasm, but at the heart of each co-sponsor's passionate love affair with itself was also a deeply felt sense of national unity.

This said, should we not be wary of nationalism's dark side? Surely this was the same national spirit of which unscrupulous politicians have taken advantage in the past when they fanned public mood with populist thoughts and military adventures. Was this not the same spirit that has so many of us to turn tail on our overseas places of work and residence like defeated dogs barking for more exclusionism? Maybe not. There are times when national spirit can and should be applauded. Indeed, the millions of beaming faces that formed the backdrop for this show of patriotic feeling are truly the bright side of national spirit.

On June 26 at 7:20 AM, just twenty-four hours after the match between Germany and South Korea, I was walking around Pennsylvania Station. Beside me I discovered a Hispanic coffee shop with two television receivers, each showing the pre-game events to Brazil's play-off with Turkey. It was a Hispanic channel, and one could see the expressions on children's faces, as the players of both teams gathered together in anticipation of the big moment. One could also see the stadium and the national flag of each country. Hearing the national anthems of Brazil and Turkey praising the great territorial expanse of the first and the traditional competitive spirit of the second did not leave me with a bad impression.

Nevertheless, from 25 minutes past the hour until half past, Disney's network affiliate, ESPN, replaced the same coverage of national anthems with a 5-

minute, pre-game, contiguous flow of commercials from "corporate co-sponsors bringing 45 minutes of uninterrupted soccer coverage". Whereas Disney apparently assumed that only the US anthem is of interest to US Americans, the Hispanic channel graciously included in its immediate pre-game coverage glimpses of the Japanese Crown Prince and his wife Masako in their royal box.

Both inside and outside the coffee shop hurried commuters pressed in and around us. Among those that took a very serious interest in what was happening on the screen were only a Brazilian immigrant, another man, and myself, however. Everyone else seemed to pass with the same indifference that I had experienced just the day before. It was a funny feeling to be surrounded by an indifferent US American public while listening to the Brazilian and Turkish national anthems broadcast by Hispanic media. In that moment I felt many aspects of nationalism all at once. Among these feelings were neither aggression nor exclusionism.

With the world coverage it received, the furor of Korea's Red Devil supporters was easily the single biggest attraction of this year's soccer event. So important was this fervor that it was picked up by the US media and broadcast to the largest soccer-disinterested national public in the world. Covered were the 3,000,000 viewers assembled before large outdoor viewing screens, the mobilization of 7,000,000 Korean sports fans, and the obvious, enormous pressure placed on referees by the excitement.

This high-level tension and Korea's forced retreat during the semi-finals did not give rise to major acts of violence, however. As Korea descended peacefully to the contest for third place, one could not help but be struck by the common sense and order that prevailed. During the dramatic victories against Holland, Italy, and Spain confetti filled the streets of those nation's principal urban centers, as well as the many Korean stadiums where the matches were played. After each and every game Korean citizens picked up the stadium trash dutifully and without complaint. When overexcited Korean men and youth threw plastic bottles, female supporters scolded them in Korean with the words "Stop! Behave yourself!" A self-flattering Korean news caption read "In the heat of battle rages a cold war".

Against this backdrop of national fervor reigned a different sort of national sentiment, however. The US team was confronted with the hard feelings of South Koreans toward the Bush administration's intransigent stance toward North Korea and the continued presence of US troops on South Korean soil. Fortunately, as the games continued, the politics associated with each victory diminished. Looking at the Japanese webpages of the *Donga Ilbo*, a well-known Korean newspaper, one could read comments like: "Politicians are corrupt, but citizens' common sense carries the day", "In the past, dictatorial administrations have used sports as a means to fool the general public; this time the sound mind of a mature citizenry shows itself capable", and "This marks the end of an era of religious and regional political folly". Such viewpoints indicate a subtle mental balance worthy of our attention.

In contrast, the New York Times and others -- in a know-it-all fashion -- portrayed Korea's outpour of enthusiasm as a display of anti-Japanese sentiment. Were the cries of a "Great Korea" emanating from the Korean crowds not the beginning of a new "no anti-Japan" nationalism? Maintaining its hesitant, but forward moving step-by-step policy toward solving the problem of

unification, while seeking to keep the constant struggle among Japan, China, Russia, and the United States from turning the Korean peninsula into a geopolitical proxy war of equidistant positioning, the South Korean government surely has its hands full. In this light Korea's strong and healthy display of national self-esteem can only be viewed as a positive gesture toward maintaining Japanese and East Asian security.

So what about Japan? Japan's loss during World War II split the Japanese nation in two: those who sought never to forget Japan's humiliation, and those who saw it as the beginning of a new era of peace. From abroad Japan has often been condemned, while at home national feelings have been suppressed and the truth has been hidden. As a result our present and future relations with our closest neighbors have been weakened.

The solid blue seas that filled Japanese stadiums during this year's soccer tournament seemed an innocent way to put behind us this stale divide. Amidst this excitement who could default anyone for having supported his own team and thus set aside the bad feelings we have accumulated over past years. Should the Japanese team be slighted for having achieved targeted improvement over its performance in Doha eight years before and in Paris just four years ago? On the other hand, the media's over responsiveness and the occasional displays of anti-Korean sentiment make one wonder whether the continuous shouting of "Nippon, Nippon" was indeed a good thing. It is difficult to say.

The wound of defeat has yet to heal among Japan's national political leaders. Prime ministers, who count their number starting with ITO Hirofumi, Japan's first pre-war prime minister; the continuation of a post war constitution that many wish to replace with something more closely resembling the Meiji Constitution; and the absence of a direct successor to the Japanese throne all contribute to our inability to shed our pre-war past. It is, as if Japan were still a wounded *Axis Power*. Since this wound persists, should we not keep in mind post-war Japan as we draft our new constitution? Moreover, should we not exercise self-restraint when it comes to the deployment of overseas troops in our own self-defense?

If Japan's national leadership still feels wounded, what about the Japanese people? How do they feel? With regard to the "I don't know, I don't understand" attitude of many Japanese was there ever doubt about their national pride when it came to this year's soccer games? As they shouted the words "Nippon! Nippon!" were they not thinking "We live in the 21st century now and share our enthusiasm for soccer with the world". Surely there was no feeling of yet to heal wounds. Should we have been disappointed that Korea's voice was larger than our own? Maybe. Maybe not. In any case, it was a strange feeling to have my own feelings of patriotism mixed with those of defensive, wounded politicians.

Just prior to the match with Russia, expressions like 'Japan-Russian War' were being tossed about in the mass media. Just what did Japan's national leadership have in mind with their cold stance against the vigor of the Korean team, anyway? One could see fleeting attempts to wed the defensive pride of Japan's national leadership with the genuine pride of the Japanese people. One cheer, one people: "Nippon! Nippon!" Clearly the images of ecstatic citizens jumping into the Dotonbori River and those of Japan's wounded political leadership did not match. What an odd couple?

Of course, no national government is free of incrimination. The US massacre of North American Indians and its world-wide military expansionism, England's colonial past and self-righteous defense of the United Kingdom, and China's Great Leap Forward and Cultural Revolution are all historical blemishes which the political leaders of these great nations seek to defend. Even South Korea, who labels itself an 'innocent victim' of Japanese aggression, is guilty of post-WWII anticommunist terror and military atrocities.

When one thinks about the world in this way, Japan does not appear so unique. Then too, neither is Japan in much of a position to play the goat with regard to international diplomacy and national security. So, where is the dark side of "Nippon! Nippon!" in all of this? In the end, a just interpretation will depend on the level of maturity with which the Japanese general public and media portray themselves in their role as East Asian diplomats.

Shortly after Japan's victory over the Russian team riots broke out in Moscow and several people were either killed or injured. This tragic event was likely a direct side effect of the game. Trailing by one point with little time remaining the Russian team began shooting wildly. The worldwide coverage of this desperate suicidal behavior must have carried over to the Russian team's supporters in Moscow. Was not blaming this behavior on feelings of political alienation brought about by the Bush Administration a little over wrought?

With the US team having made it into the quarter-finals the US American press finally became excited. Soon thereafter, special coverage of the events began; notwithstanding, the excitement only lasted a few days. It was so brief in fact that even coverage of Germany's defeat was cut short by the June 26th announcement that WorldCom had also fell victim to the same accounting scandal that has plagued the nation since the fall of Enron. Yes, the US is a latecomer to world soccer! Although the rumors surrounding the WorldCom scandal had already been splashing around for several months before the announcement, 3.8 billion dollars of cosmetic accounting is unprecedented, and we should all be thankful that markets are still confused about it.

As a Manhattan commuter I board the 6:30 AM train from Princeton Station on my way to work every morning. The train is always filled with people reading the Wall Street Journal on their way to Wall Street. On Thursday, the 27th, the atmosphere was decidedly different. The train no longer resembled a sleepy book salon, as everyone was talking, as if they knew each other. They must have all been domestic stock traders as the air was filled with complaint. "I can't believe it. Another ordinary company. Wherever you look, another ball of flames." And so it went, on and on.

A smartly dressed 40-year old woman wearing a dark blue suit was filling the ear of the man sitting next to her with a loud voice: "We start again at 8:00 this morning. Yesterday I put in over time attending meetings until who knows when. Still I am none the wiser for it. The market is down, and my boss hasn't a clue". Whether this or that, the Enron affair continues to drag on. Moreover, it is not likely to let up, until the government officials involved in it come clean. Those tainted by the affair extend all the way up to the office of the US Vice President. In the meantime the specter of distrust hanging over the nation's accounting system will likely lead to more misdirected blame and sacrificial lambs.

The difficulties faced by WorldCom, and before it the Tyco Corporation, are not

the same, however. What makes the Enron Affair so different is the degree and level of government involvement. Clearly the manipulation of accounting books took place in all three cases, but the collapse of Enron is politically smeared by White House energy policy. The nation's level of carbon dioxide emissions and California's electric power supply stand out in particular. In contrast, firms that over-invested during the high tech boom are being driven out by market discipline, and the problem will likely end that way.

The problems associated with maintaining foreign and domestic affiliates, scattering investments far and wide, and financial management styles that fail to hedge against impending risk are all too apparent. Surely, the dreams of a "new economy" awakened during the 90s IT boom have proven illusory. As a result the ideological power of capitalism and the pooling of large capital sums that formed the basis for the intended industrial transformation have been greatly weakened.

Indeed, news coverage of the recent opening of the G8 Summit in Kananaskis Canada was highlighted by demonstrators surrounding the summit's location singing chants against economic globalization. Borderless capital destroying the currencies of weak national economies, the abusive employment of cheap labor, and environmental destruction in developing countries, are just a few of globalization's more negative effects. Nevertheless, money is money - a neutral commodity; and economic prosperity and notions of economic costs and benefits with regard to social change are not entirely negative. Thus, we should be concerned about the possible failure of the US capitalist system to bring about the needed changes. Indeed, if things continue as they are, the initiatives for change in the international community are likely to become increasingly militant. This shift of attention from economic to political solutions is worthy of our attention.

Surrounding the confusion in the stock market are a large number of "a person like that..." scandals. Martha Stewart, the immensely popular US star of modern living, was recently accused of insider stock trading.

Needless to say, the US American public is fed up! On June 26th the West Coast's Federal Court of Appeals declared the citing of the words "under God" in the Pledge of Allegiance in public schools unconstitutional and an infringement on individual religious freedom. Democratic congressional members, who pander to popular opinion, were outraged and responded to the decision with a flurry of opposition. Under such conditions the future effectiveness of the decision can be doubted. On the following day the US Supreme Court ruled that public outlays to private, parochial schools were constitutional. In the current post-911 social climate will the US judicial system, the so-called "guardian angel" of American democracy, be able perform its task?

The spirit of America is confused and no longer resembles the simple cheer of "USA! USA!" that we heard during the recent past winter Olympic games. US America's political elite continue to promote the War on Terror as if no one can trust anyone. Indeed, the Stars-and-Stripes of post-911 America have faded rapidly in the wind and with them the national spirit that they once represented. In the middle of this confusion America will celebrate its Day of Independence on July 4th. Perhaps amongst the accompanying firework displays and political confusion a new solution will be found. Is this not the true spirit of America?

REIZEI Asahiko. 2002. Looking at world nationalisms through an overseas Japanese prism (Samazama na nashonarizumu). Japan Mail Media, ed. MURAKAMI Ryû. June 29, No.172.

<<http://jmm.cogen.co.jp/jmmarchive/r012047.html>>.

Word Count: 2798

Line Count: 272